022 セリューズ 【 Ceruse 】

Gruppo: 8
顔料名：酸化チタン
Titanium Dioxide PW6

画家：ピエロ・デラ・フランチェスカ（1412～1492）
Piero della Francesca
「聖十字架伝説」1452-1458年
-Leggenda della Croce-
フレスコ（Fresco） サン・フランチェスコ聖堂[アッシジ]

鉛白（セリューズ/Ceruse[仏]～別名/シルバーホワイト、クレムニッツホワイト）は、古代から使用されてきた最も歴史のある白色顔料で、ホワイトレド(WhiteLead［英］:レド＝“鉛”の意）とも言い、速乾性、堅牢性（被覆力）に大変優れています。
特に絵画の長い歴史の中でセリューズは、19世紀頃までは唯一の白色系顔料として使われ続けてきた色材です。塩基性炭酸鉛を組成とし、古くは、鉛の薄片を空気中で酢酸蒸気反応させることで作られていました。

ルネッサンスセリューズは、チタンベースから生成したホワイトなので、有害性と（混色による）黒変化や黄変等の使用上の問題から取扱いに注意が必要とされてる鉛白を含まず、安全で安定した使用が可能です。また、シルバーホワイトの特性である速乾性/堅牢性/固着性という優れた面も兼ね備えています。
チタニウム系顔料を伝統的なウォールナットオイルで練った、品格のある温か味を持ったアイボリー系ホワイトで、粗粒子によるマット（無光沢）な質感と、ざらつきのある半不透明な肌合いを作り出します。チタン白より、着色力を低くすることで、混色時の色の濁りを最小限に抑えることが出来、速度や隠蔽力と優れた耐光性を実現します。

108 マジョリカイエロー 【 Majolica Yellow 】

Gruppo: 9
顔料名：アンチモン黄-ニッケル-チタン
Antimony-Nickel-Titanium Oxides PY53

画家：アーニョロ・ブロンズィーノ/ Agnolo Bronzino (1503～ 1572)
「紅海渡歩～海を渡るモーセ」 1540-1545年
-Moses striking Water from the Rock, from the Cappella di Eleonora-
フレスコ（Fresco） ヴェッキオ宮殿/エレオノーラ・ディ・トレド礼拝堂 [フィレンツェ]

アンチモン(化合物)は古代より使用されてきた顔料の一つで、最古のものでは有史前のアフリカで利用されていた痕跡が残っています。
紀元前15世紀のバビロニア王国・アッシリア王国の陶器用釉薬からもアンチモンが認まれており、その歴史は大変古いとされます。
アンチモン(Antimony[英]～銀白色で光沢質の硬く脆い半金属固体/レアメタルの一種)は、“孤独嫌い”を指すアンチモノス(Anti-monos[ギリシャ語])が語源になっています。
このアンチモン有するニッケルチタンイエローは、1940年代に本格的に顔料化された色材で、大変安定した物性を持ち、約1000℃まで耐えうる強靭な耐熱性があります。

マジョリカイエローは、たおやかで気品のある柔らかいレモン調の絵具で、遅乾性で着色力は強くありませんが、無機顔料として極めて優れた堅牢性/耐石灰性/耐光性/耐酸[アルカリ性/隠蔽力を持っています。
その艶明な色調は繊細で微細な変現に最適で、敏感なトーンを生み出してくれます。
組成はアンチモン黄/ニッケル/チタンの複合酸化物(Mixed-metal Oxide)からなり、金属酸化物を混合状態で高温焼成して出来ることから、焼成顔料(Calcination pigment)とも呼ばれています。通常、重金属系顔料(水銀、ヒ素、アンチモン、鉛等)には毒性がありますが、ニッケルチタンイエローは本来有害とされる物質が製造過程において生成変化を起こした結果、大変安定した物質になります。
近年の品質向上に伴ない、安全性に優れた有害性の低い顔料に仕上がってます。

169 ケルメスレーキ 【 Kermes Lake 】

Gruppo: 9
顔料名：アントラキン
Anthraquinone PR83

画家：ヤコポ・ダ・ポントルモ（1494～1557）
Jacopo da Pontormo
「訪問」(聖母のエリザベツ訪問) 1528-1529年
-Visitazione-
油彩/板（Oil on table） サン・ジケーレ聖堂 [フィレンツェ]

格調高い古代の染料“ケルメス”は最も古い天然染料の一つで、旧/新約聖書にも記述されている色材です。
ケルメス(Kermes[中世ラテン語]：南ヨーロッパ固有の樫/ケルメスオーク（Kermes-Oak）に寄生するケルメスカイガラムシ(Kermes-Licia)の雌を乾燥して得られる赤色色素)は、原料・色調・科学組成共にコチニールに大変酷似しています。その歴史は古代エジプトまでさかのぼり、皮の染色剤として用いられたり、アングロスカンジナビアン・ヨークにおいては埋葬の際に遺体を包む布などにみられました。イタリア絵画ではこのケルメスレーキは特に愛用され、ミケランジェロ作品の中にも使用を認めることが出来ます。
ケルメスは、英語の“Crimson[クリムソン]”“Carmine[カーマイン]”の語源でもあり、ケルメス色素(又はグレイン色素)を明暗を用いて比較をさせるとクリムソンレーキとなります。

1868年～ドイツ・BASF社の化学者カール・グラーベ[Carl Grabe]&カール・リーバーマン[Carl Liebermann]によってアントラセンから合成方法が開発され、天然同等の人工染料アリザリン(Alizarin)、同じくアントラキノンを主成分とするクリムソン、カーマインが作られるようになりました。コチニール/アカネ/ラック色素等～キノン系色素の多くはアントラキノン系色素からなり、又、多くの天然色素がこのアントラキノン(Anthraquinone[英]：石油中の軽油から得られる非水溶性結晶物で、(キノン系色素のうち)アントラセンを微化して得られる鮮黄色の結晶の総称)骨格を持っています。
※この中の“アカネ色素”は古代染料として古くから用いられ、これをレーキ化(Lake=染料の意)したマダーレーキは、天然レーキ中最も安定した色材の一つです。

ルネッサンスケルメスレーキは、格調高く燃えるような触感的な赤色を特長とし、アントラキノン系顔料の特性である、高い透明感と冷ちかな質感を持った絵具です。
遅乾性を帯びゆったりした乾燥のため、厚塗り向きとはいえませんが、グレーズ(薄塗)技法に高い鮮鋭度と優れた耐光性を発揮します。染料系では高レベルの耐久性/堅牢性を誇っており、この際(鮮やかな色調)は他に追随を許さない存在感を放っています。

217 パリスレッド 【 Paris Red 】

Gruppo: 9
顔料名：硫化セレン化カドミウム
Cadmiumsulphoselenide PR108

画家：マザッチオ[マザッチョ]（1401～1428）
Masaccio
「聖ピエロニムスと洗礼者聖ヨハネ」 1423-1428年
-Santi Geroleno e Giovanni Battista-
テンペラ（Tempera） ロンドン・ナショナルギャラリー [イギリス]

赤色の歴史は、“人類最古の時代”とされる旧石器時代後期(推定:3万年前)に描かれた、ラスコー/アルタミラ洞窟の壁画に始まります。
そこに使用されていたのが、赤色無機顔料であるベンガラ(弁柄/Bengala[オランダ語]～主成分は酸化第二鉄。名はインド/ベンガル地方の産出だった事に由来)でした。
当時、これらの赤は“魔除け”“再生”の色として考えられていました。
そして時代は移り、紀元前7世紀～古代ローマ都市/ポンペイの壁画[秘儀荘]に描かれた「ディオニソスの秘儀」と呼ばれるフレスコ画に使用された、通称“ポンペイ・レッド”と呼ばれる鮮やかな赤、それが辰砂(シナバー：Cinnabar[英]～硫化水銀)でした。
しかし、その古来の赤である辰砂は有毒性を持つ水銀を含んでいるので、現代では有害性の低いバーミリオンに代替されています。

パリスレッドは、このバーミリオンと同じカドミウム金属化合物をベースとし、呀え渡るような高い明度、そして力強さとインパクトを持った赤です。
滑らかな質感、速乾性、高彩度な発色に長け、高い屈折率による隠蔽力、着色力、耐光性、堅牢性の高さは絶大です。
このカドウミウム系を含む金属系無機顔料[コバルト/鉛/クローム/マンガン等]は、粒子径が大きく吸油幅が少ない為、絵具化する際の油量を軽減することが出来、さらに絵具の乾燥をうながす酸化重合促進剤としても働くので速乾性にも優れています。
又、近年の精製技術向上に伴ない混色制限もありません。
ただし、カドミウム金属(化合物)を顔料としているため、毒性には注意を必要とします。
※カドミウム(Cadmium[英]：鉱物や土壌に存在する重金属物で亜鉛族元素の一つ。亜鉛鉱と一緒に産出される軟金属で、銀白色の金属光沢を持ち、比較的錆びにくい)
1817年/ドイツ、ゲッティンゲン大学の化学者フリードリヒ・ストロマイヤーによって発明され、その後、赤橙色顔料やセレン赤が顔料化されました。
硫セレン化カドミウム[Cadmiumsulphoselenide]は、硫酸カドミウムを硫化ナトリウム＋セレンと共に沈殿生成し、セレンへの硫酸カドミウム添加量/沈殿条件の調節によって、カドウミウムオレンジ～ディープマルーンまでの各種・濃淡を生み出す事が出来ます。

281 バーミリオン 【 Vermilion 】

Gruppo: 9
顔料名：硫セレン化カドミウム
Cadmiumsulphoselenide PR108

画家：アントネロ・ダ・メッシーナ（1430～1479）
Antonello da Messina
「男の肖像」1475年
-Ritratto Virile-
板/油彩 (Oil on table) ロンドン・ナショナルギャラリー [イギリス]

紀元前からの古い歴史を持つ、壮美で鮮烈な鮮やかさのある赤色顔料で、ポンペイ/ローマ遺跡の壁画からも確認されており、15世紀/フランドル派の絵画の中にもその使用を認めることが出来ます。
耐久性においては今なお色褪せることなく、当時の輝きを放ち続けるポンペイ壁画からも明らかな様に、比類なき堅牢性と耐光性を保持しています。
語源は“語源虫(えんじ)”を意味する“Vermiculum[ラテン語]”から来ており、東洋の朱である辰砂が語源を思わせる紅色だった事に由来します。
古来は天然赤色顔料～辰砂(真朱/シナバー：Cinnabar[英]：硫化水銀)を砕いて、ピグメント状にしたものを顔料として何世紀も以前から用いられていましたが、その歴史同様に古い時代から、水銀と硫黄の元素を化合させた人工辰砂(朱[銀朱]/バーミリオン：Vermilion[英])を作る合成法も既に発見されていたのです。人工辰砂といえどその色材特性において、化学的/物理的(光学的な差異)な見地からも天然物と何ら遜色はなく、15世紀/イタリアの画家達はこのバーミリオンを主として使用していました。

ルネッサンスバーミリオンは壮美で重厚、深い鮮やかさを持った黄味の強い赤色無機顔料で、油絵具の内で最高の不透明性と耐久性を誇る絵具です。濃度や粘度と速乾性に優れ、堅牢性/耐光性/着色力において非常に高いポテンシャルを発揮します。
有害とされる硫化水銀は含んでいませんが、カドミウム金属化合物を顔料としていたため、毒性はあるので取扱いには注意を必要とします。

314 グリークグリーン 【 Greek Green 】

Gruppo: 10
顔料名：酸化コバルト-チタン複合物
Cobalt-Titanium Oxides PG50

画家：セバスティアーノ・デル・ピオンボ（1485～1547）
Sebastiano del Piombo
「サン・ジョヴァンニ・クリストーモの祭壇画」 1510-1511年
-San Giovanni Crisostomo and Saint-
油彩/カンヴァス (Oil on Canvas) サン・ジョヴァンニ・クリストーモ教会 [ヴェネツィア]

グリークグリーンは、優美さ漂う落ち着きと品格ある明緑色で、酸化コバルト-チタンの固溶体(複合酸化物)を組成とするコバルト緑(Cobalt green[英])です。
非常に優れた耐光性、耐久性を兼ね備えた金属酸化顔料で、基本特性は半透明で隠蔽力は強くありませんが、マイメリの技術によってその不透明性は高いレベルを保持し、薄塗りにおいてもその高彩度・発色性を失うことはありません。又、高温下でも耐えうる耐候性/耐酸化性/耐アルカリ性に秀でた安定力を持ち、混色制限もありません。
近年の品質向上に伴ない安全性にも優れてはいますが、コバルト化合物を顔料としていたため毒性はあるので取扱いには注意を必要とします。

コバルトは15世紀末、ザクセン/ボヘミアの境界付近(現:ドイツ東端部/チェコ西部)のスマルト鉱山で発掘されました。しかも当時の冶金技術では、この有毒な鉱石(砒化コバルト)を薬品処理する事が出来なかった為、鉱夫達の間で“山の悪魔(Kobold：コボルト[独]：ドイツ民話に登場する邪悪な魂を持つ小鬼/Kobalos[ギリシャ語]：害悪な人)”と呼ばれていました。
そして時代を経て、1737年/スウェーデンのゲオルグ・ブラント(Georg Brandt)によって、初めて鉱石中から未知の金属だった“コバルト”が抽出され、その存在が実証されたのです。コバルトの語源は、その古称名“Kobold”から採り“Cobalt”と命名されました。
※コバルト(Cobalt[英]：鉄族元素の1つで、強磁性のある銀白色の金属。高い耐酸性と鉄以上の耐候性を持つ。また、人体にとっては不可欠なビタミンB12の一部を構成する必須ミネラルでもある)

349 マラカイトグリーン 【 Malachite Green 】

Gruppo: 10
顔料名：水和酸化クロム
Hydrated Chromium Oxide PG18

画家：ジョルジョーネ（1477～1510）
Giorgione
「羊飼いの礼拝(アレンデールの降誕)」 1503～1504年
-Adoration of the Shepherds (Nativita Allendale)-
油彩/板 (Oil on table) ワシントン・ナショナル・ギャラリー [アシントン]

マラカイト(岩緑青[いわろくしょう]：Malachite/Mountain green[英])は、最も古くから知られた鮮明な緑色顔料であり、天然(鉱物性)塩基性炭酸銅を組成とし、その分子構造はアズライトに非常に酷似しています。
※アズライト＝Azurite[藍銅鉱/孔雀石/岩緑青]は、15～17世紀にかけての西洋絵画においては最も重要な緑色顔料であり、東洋においても敦煌/石窟寺院の壁画、宋～明代の壁画に使用されていました。その歴史もまた、アズライトのそれと完全に並行しているといって過言でなく、その理由に、この鉱石が眠ってアズライトと共存(生)していることが多いからであり、またアズライトが吸水されるとマラカイトへと化学変化を起こすことにあります。古代エジプト王朝時代には、この石を細かく砕いて化粧のアイラインとしても使用されていました。
そして1800年頃までの西洋絵画における主流であったこれら天然緑色顔料は、19世紀を境に飛躍的に進歩を遂げる人工顔料へと形を変えていきます。
1859年/フランスの化学者J.B.ギメが水和酸化物製法から、ヴィリジャンを生み出しました。ヴィリジャン(Viridian)は、Viridis[ヴィリジス(ラテン語)＝緑の意]を語源とします。

マラカイトグリーンは、鮮やかな緑色をした透明粒子を持ち、顔料史からみても大変独特で、他に類を見ない異彩を放った色材です。
酸化クロム系顔料ですが、結晶水を含有する水和酸化クロム物であるため、高い透明性と深く鮮やかな発色を持ち、薄塗り/グレーズ技法に高い能力を発揮します。
強い着色性と、耐光性/耐酸[アルカリ]性/堅牢性に大変優れた絵具です。

379 ムラーノブルー 【 Murano Blue 】

Gruppo: 9
顔料名：アルミン酸コバルト
Cobalt-Aluminum Oxide PB28

画家：ティントレット（1518～1594）
Tintoretto
「天の川の起源」 1575～1580年
-The Origin of the Milky Way-
油彩/カンヴァス (Oil on Canvas) ロンドン・ナショナルギャラリー [イギリス]

古来より自然界における“青色”は、他の色と比べても存在それ自体の稀少さから、畏怖/畏敬の念を呼び起こさせるものの象徴として、また、ある時は忌まわしい/蛮族の象徴として、時には人間にとっての至上/神聖な存在にのみ与えられる色として用いられてきました。古代エジプト王朝～ファラオは、黄金と共に環境色(Lapis Lazuli)を最上の色とし、神の化身として崇め扱い、東洋/仏教では神聖色として仏具、極楽浄土を描き表わす曼荼羅に用いられてきました。中世の西洋においてのそれは、“天国の色”、“聖母マリアの色”、そして“神を象徴する”至上の色と位置づけられたのです。
その青の歴史は、紀元前6000年頃から使用されていた最古の青～タイセイ(Woad：インディゴに似た青色染料)に始まり、インディゴ、ウルトラマリン、スマルトブルー、エジプシャンブルー、そして様々な改良と開発の末、現代を代表する青～プルシャンブルーやフタロシアニンブルーへと変遷を辿ってきたのです。
中でもスマルトブルー(花紺青[Smalt Blue]～ガラス質の人工顔料。酸化コバルトで着色した珪酸ガラスを粉砕して作る)は、世界最古のコバルト系顔料で、火を使う技術に長けていた古代エジプトの職人技術によって開発された人工顔料です。
1802年/フランスの化学者、テナール(Louis Jacques Thenard)が、コバルトを用いた最も初期の人工顔料開発に成功しました。この絵具にはそのテナールの名に由来する、テナールブルー[Thenard Blue]という古称名が存在します。コバルトブルー(Cobalt Blue[英]：アルミン酸コバルトを主成分とする無機顔料)は当時、その比類のない美しさと、ウルトラマリンでは作り出し得ない“微妙なトーン”が出せること、そしてなにより、混色制限がなくあらゆる技法(陶器の釉薬/絵具・塗料/彩色)にも応用が出来るという最大利点を持っていた為、最高峰の顔料として賞賛され受け入れられたのです。

ムラーノブルーは、抜ける様な鮮烈な発色と品格のある美しさを持った色で、耐光性/耐候性/耐酸[アルカリ]性のいずれにも優れている絵具です。
被覆力・着色力はそれほど強くありませんが、強い速乾性と非常に安定した物性を持ち、鮮やかな半不透明の画面を生み出します。
また、近年の品質向上に伴ない安全性にも優れていますが、コバルト化合物を顔料としているため毒性はあるので取扱いには注意を必要とします。

401 ミケランジェロブルー 【 Michelangelo Blue 】

Gruppo: 8
顔料名：アルミノケイ酸ナトリウム
Sodium Polysulphide-Aluminiumsilicate PB29

画家：ミケランジェロ・ブオナローティ（1475～1564）
Michelangelo di Lodovico Buonarroti Simoni
「最後の審判」 1536～1541年
-Giudizio Universale-
フレスコ（Fresco） システィーナ礼拝堂 [ローマ]

ウルトラマリン(Ultramarine)は、ヨーロッパで「海を越える」の意味で、元々はアフガニスタンでしか産出されない大変貴重な鉱石“ラピスラズリ”が黒海を渡って、イタリア/ベニスに持ち込まれたことが語源となっています。
中世ヨーロッパにおいて天然ウルトラマリン(ラピスラズリ)は、その貴重さゆえに大変高価な顔料であったみ、“金”と等価、又はそれ以上の価値を誇っていました。その為、当時の装飾家達にとってはこの貴重な顔料をめったに使用する機会がなく、キリストや聖マリアのローブ等、一部を描きわける際にのみ用いられたとされます。17世紀・オランダで活躍し、現存する絵作品数36点程、その静謐で厳密な空間構成と緻密的な陰影表現で知られる巨匠の画家、フェルメール(Johannes Vermeer)が惜しみなく使用した色としても有名で、その呼称に“フェルメール・ブルー”という呼び名もあるほどです。
最古の青色顔料である天然ラピスラズリ(Lapis-Lazuli[ラピス＝ラテン語“石”/ラズリ＝アラビア語“天空/青”の意]：方ソーダ石グループ鉱物のラズライトを主成分とする無機顔料)は、6～7世紀のアフガニスタン/バーミヤン壁画における使用が始まりであると同時に、これが鉱物顔料の始まりとされています。
1800年代、J.B.ギメが人工ウルトラマリンを開発するまでは、これが唯一のウルトラマリン原料でした。天然との違いは、丸み帯びた均質な微粒子を持つ点のみで、物理的/化学的な見地からみても、組成、分子構造は天然のものと同一です。

ミケランジェロブルーは、ルネサンス期の巨匠～ミケランジェロの名画「最後の審判」に使用された天空色そのもので、深い神秘的を帯びた遠く鮮烈な青碧色の絵具です。
ウルトラマリンの低屈折率が生み出す美しい透明性、極めて高い純度によって織り成される高彩度な発色は、いかなる顔料によっても再現することは出来ません。
塗ることにその深みと厚みを増していくミケランジェロブルーは、まさに絵画の歴史をその色によって体現する絵具と言えます。
耐光性は僅かに劣りますが、優れた速乾力と経年劣化にも強い高い堅牢性/固着性/耐アルカリ性の特長を持ち、安全性にも優れた顔料を使用しています。

478 マミー 【 Mummy 】

Gruppo: 8
顔料名：ギルソナイト
Gilsonit NAT Bk6

画家：ミケランジェロ・メリージ・ダ・カラヴァッジョ（1571～1610）
Michelangelo Merisi da Caravaggio
「エマオの晩餐」 1605～1606年
-Cena in emmaus-
油彩/カンヴァス (Oil on Canvas) ブレラ美術館 [ミラノ]

マミー(ギルソナイト[英]：天然アスファルト/アスファルタム(Asphaltum)から抽出された特殊な樹脂性炭化水素)は、黒曜石のような冷らかな光沢と質感を持ち、高粘性のある非常に美しい絵具です。
ゆっくりと固まっていく遅乾性を帯び、その重厚感をまとった色調は、画面に独特の静謐さ、深み、そして威厳を与えてくれます。
ポテンシャルの非常に高い顔料で、極めて優れた固着力/被覆力/耐候性/耐光性を持っています。高純度生成された半透明の樹脂質は、塗りの淡さに比例して超フラット面を作り出し、黒光りするガラスのような高い反射率を生み出すことが出来ます。
同じ遷青であるビチュームとは組成・成分共に全く異なる物質で、石油が岩石に浸透して、長い時間をかけ変性した硬質アスファルトと位置付けられています。そのため、使用時にアスファルト系特有の匂いがしますが、有害とされているタール系物質を含有しないので人体への悪影響もなく安全性にも優れています。

マミー(Mummy[英])：モミィ(Momie[仏])の名称は、ペルシャ語“ムーム(Mum)＝遷青”を語源としています。※遷青(れんせい＝Bitumen)～天然、及び人工炭化水素からなる化合/混合物(非金属誘導体)などの総称。アスファルト/タール/石油系の総称。
アスファルトの歴史は大変古く、古来より接着[防腐]剤として使われ、旧約聖書の「創世記」にはバベルの塔の建設に使われたという記述も残されている原料です。
また、紀元前1000年頃[ギリシア/ローマ時代後期]の古代エジプトのミイラにも、それまで防腐剤として使用されていたミルラ(コンニフォラ属の樹木)や、ピャクシン等から採れる植物性樹脂の代わりにアスファルトが使われるようになりました。

17世紀・オランダが生んだ巨匠レンブラント(Rembrandt Harmensz. van Rijn)は、アスファルトを画面のグレーズに用いたとされ、彼の代名詞である“キアロスクーロ(明暗)技法”に関わりの深い絵具であると言える。
現代においてもその汎用性は大変高く、印刷用黒インキの樹脂原料/家具の着色塗料/鋳物の鋳造/ヴァイオリンの塗装ワニスとしても利用されている。

538 ビスタ 【 Bistre 】

Gruppo: 8
顔料名：カーボンブラック
Carbon Black PBk7

画家：ジョヴァンニ・ベッリーニ（1433-1515）
Giovanni Bellini
「聖母子と聖カタリナ、マグダラのマリア (聖会話)」 1490年
-Madonna con il Bambino e le sante Caterina e Maddalena-
油彩/板 (Oil on table) アカデミア美術館 [ヴェネチア]

古来より最も使用され続けてきた黒色で、光を完全に吸収する顔料であるカーボンブラック(Carbon Black[英]：黒炭/炭素微粒子)は、樹脂分のある木材やアブラ材、油、天然ガス等を燃焼(又は不完全燃焼)させて出来た油煙から作る顔料です。
カーボン原料には煤/炭/鉱物など様々なものがあり、種類/材質によって色味の幅・濃淡が生まれます。
それ以前の旧石器時代/ラスコー洞窟壁画に用いられたのは、ボーンブラック(Bone Black[英]/Animal Black[英]：骨炭～獣骨を焼成/製造したもの)で、これが黒色顔料史最古のものとされています。そして、そのカーボン[煤/墨/炭]の絵画史を振り返る時、黒色系顔料の一端に存在するのがビスタです。

ビスタ(Bistre[仏:英]/Bister[英]：樹脂分を多く含む木材やぶななどを燃した油煙)から抽出する、黒炭と木タールの混合物)の歴史は、確認されてるものとしては、14世紀/イタリア書物の中に描かれた挿絵に使用されたものが残っていますが、ある文献にはそれ以前の色材としての使用が認められています。
色調・組成共にアスファルトに類似しており、原料/生成処理の違いによって金[黄]褐色～焦げ茶色～鉄錆色と様々な色合いを作ることが出来ます。
「光と影の魔術師」と呼ばれたレンブラントは、このビスタ/カーボンを使用して、水彩デッサン(淡描)や～油、銅版画(カーボンインク)で数多くの傑作を世に残しました。

ルネッサンスビスタは、その歴史の再現を遂げる黒です。
非常に高い着色力と傑出した隠蔽力を持ち、耐久性、耐酸[アルカリ]性においても大変優れています。バランスの良い黒色度(陳黒度)を持った知性を際わせるマットブラックで、粗粒子による鮮光沢な質感、ざらつきのある力強い肌合いが特長です。
温か味のある濃褐色ベースの黒が生み出す深い色調は、この色が古来より継承され続けてきた記憶を呼び覚ましてくれます。